



一賞村女山
多川俊雄園

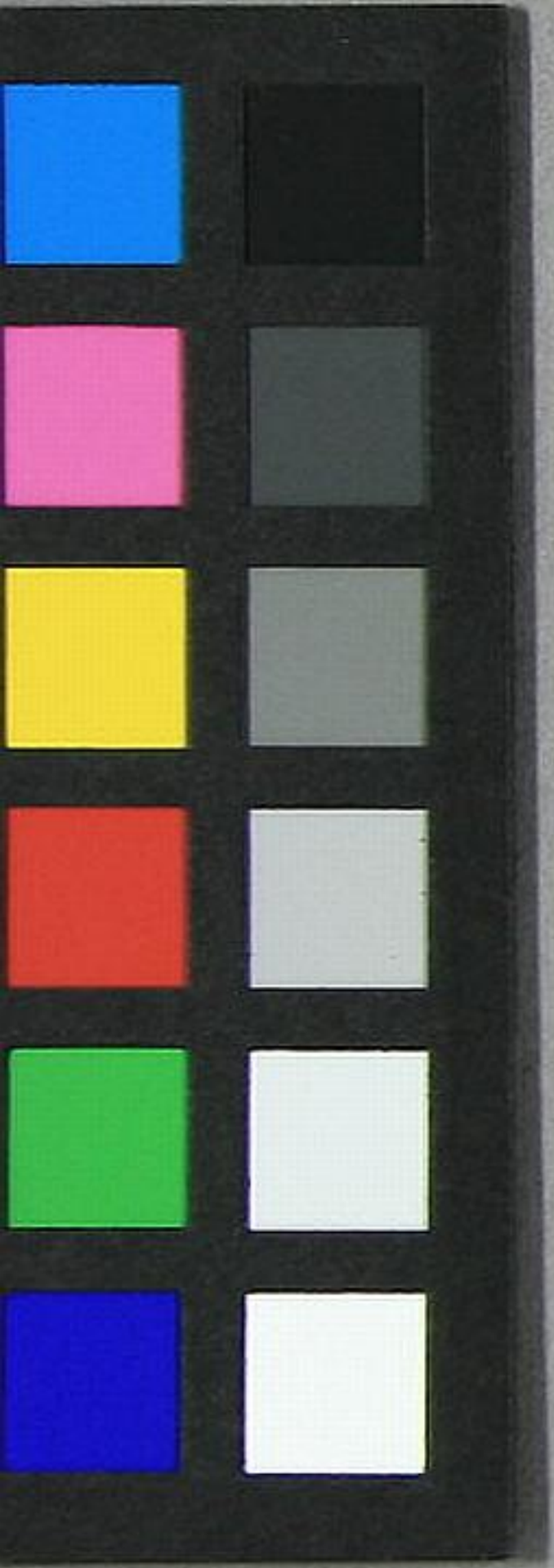
あはれ
日本物造
孟齋若虎画

才原語
出
版

初編下

初編中

初編上



A 453
1

けのきぎ

我のきぎの新聞第三百廿号(本年五月廿八日)の紙上を以て其発端を説起し号を逐て連日掲来りし毒婦阿衣の傳ハ其実録に據て余の戯れに筆を起らせしは固らず看客此喝采を蒙り新紙の發賣多を加ふるの榮を得たれど既に紙上に示せし如く拙優芳川権十郎の賞鶴たりし時同人を懲役又陥れ其身の嚴刑に處せられたる大眼目ハ只阿衣の末路の一事のみ其生涯此奸悪を数ふれば数條の珍説奇談多端に凝り新聞紙面に悉く能はざるのみあらハ一場の説話も数号に凝るを以て看客或ハ其首尾照應を誤るの憾なきにあらねバ金松堂此主人の乞に應じ半途にして紙上此掲載を止め岡本子をして之を双紙に綴らせ爰に初編を發兌せり題して夜嵐阿衣花廼仇夢といふ其顛末を記するや曾て新紙に掲げしものと故らに参差表裏を不すを以て應る看客の心を樂ましむるものあらん

明治十一年六月 芳川俊雄記

夜嵐於衣花廼仇夢初篇緒言



夜嵐

阿衣

花廼

仇夢

芳川 俊雄

岡本

勘造綴

永島

孟齋

画

上の巻

金松

堂梓

48-8095



紙伊國屋
角太郎

松坂屋の娘
阿八重

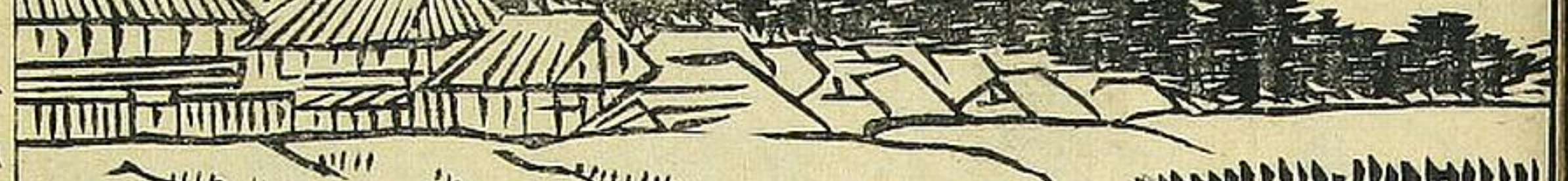


大窪家の愛妻
原田おとめ

醫師
黒林玄達

夜山嵐

飛端 夜嵐
 八重山櫻
 川の政
 事におこ
 百八所
 京の東
 江戸聖
 よが甲



頃本町辺の薬種同
 屋で人知る紀の國
 や角太郎といふ
 早く西親に
 別れ十八才に
 と家名残
 園相續せしが性来
 歌俳借茶の湯そ
 の外遊藝技のみ好ま
 一とて兔も用家業
 思ひ僅
 園西三
 年にて弟
 竹二郎へ



夜嵐

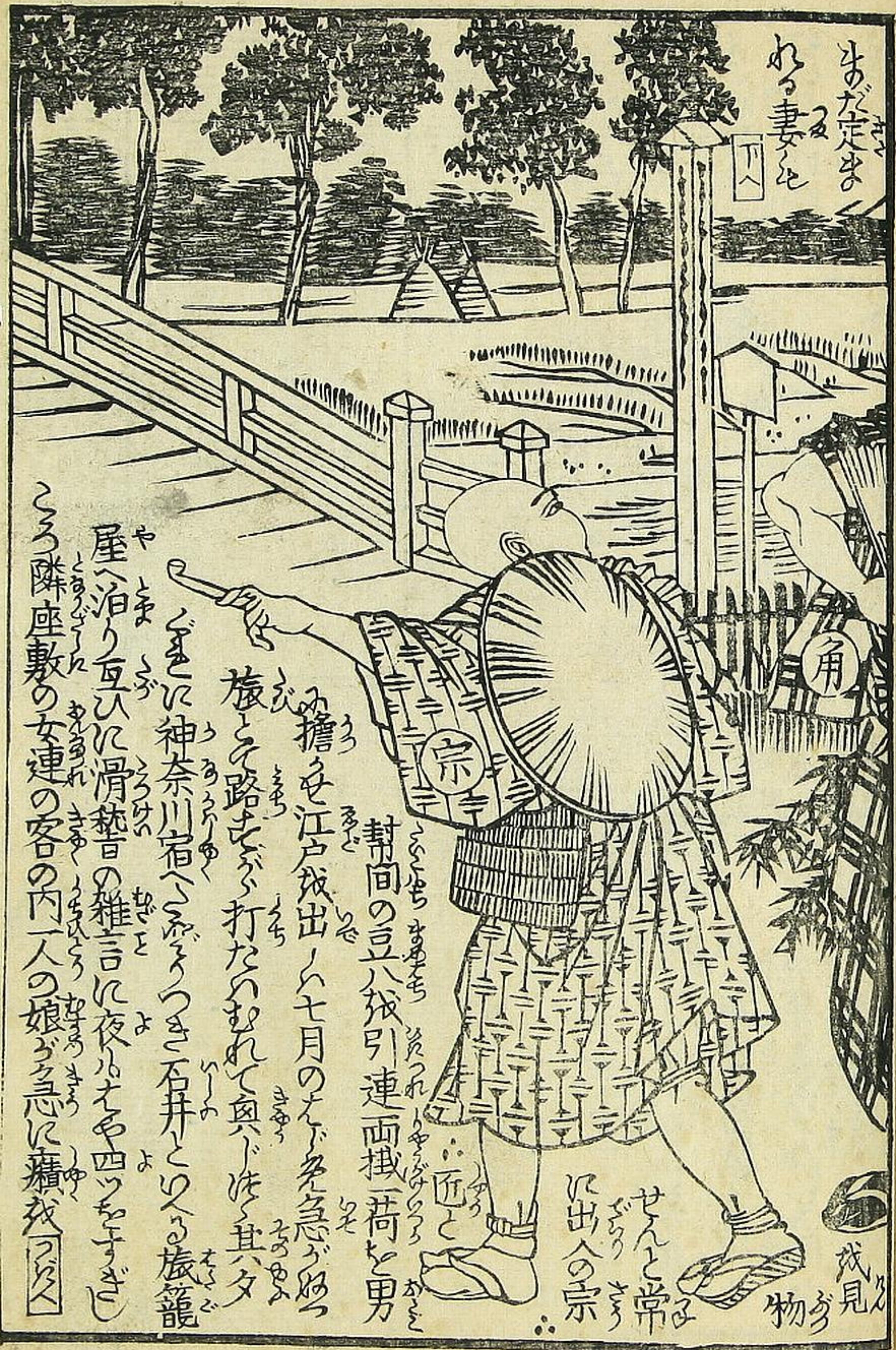
日本橋の
於吉

徳川の御家人
三世奇勇次郎

文
山
風
上

三

二



よのだ定ま
ねる妻と

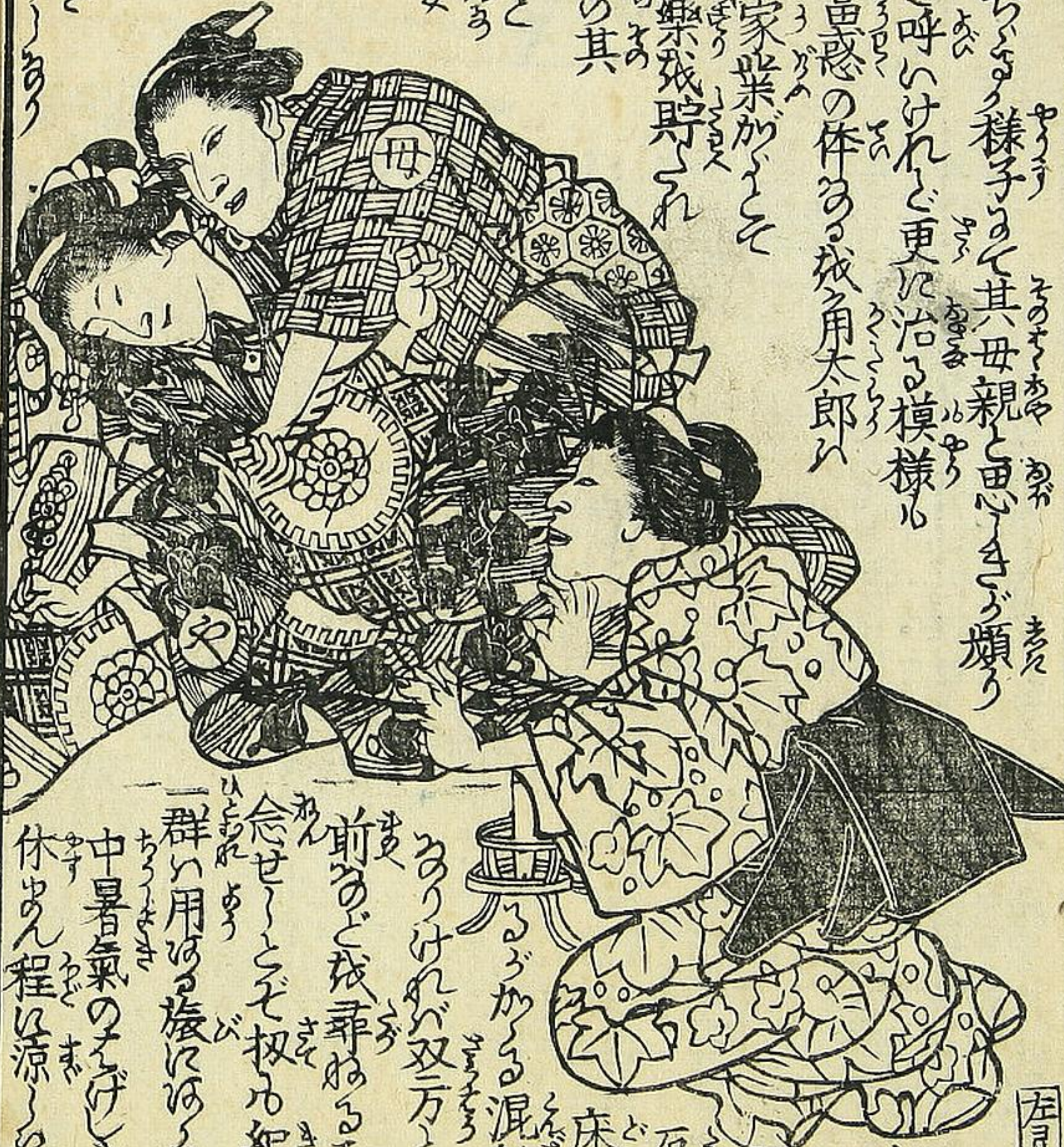
封筒の豆八旗引連両旗荷を男
 擔ぎて江戸旗出の七月のたふ冬急がぬ
 旅とて路をたぐり打たれおれて奥にほ其夕
 ぐまに神奈川宿へついで石井とりの旅籠
 やま泊り互ひに滑稽の雑言に夜も七や四つをすぎ
 ころ隣座敷の女連の客の内一人の娘が急に癪我



名跡
 我譲る自
 多の豫
 ありん
 ありん
 牛島
 の辺
 ありん
 小の
 梅の
 別荘
 へ移り
 せめて

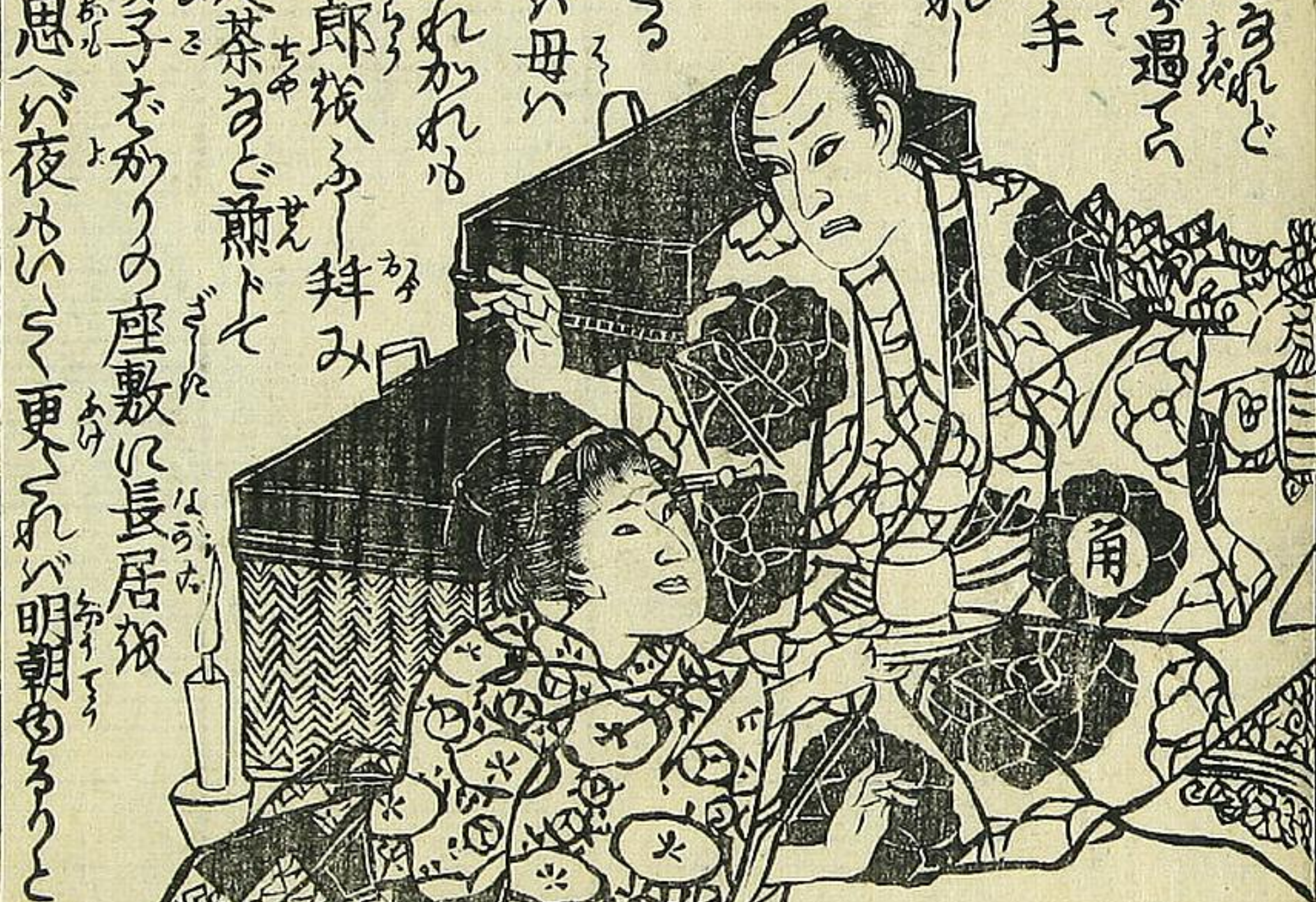
朝の
 賞とて風流ののみ世に送り
 花を樂み
 夕べの月夜
 今年に
 暑のしめては度平の結
 思ひ
 箱根の
 湯
 治る江の
 島え

〇おこしとどおらるる様子と其母親と思ふも煩う
 にお八重と叫びけれど更に治る模様
 ありければ昔々當惑の体なる哉角太郎の
 氣の毒に思ふ家業がごとく
 と心こひひ良薬我貯され
 と見知らぬ女の其
 中へまぎらふ夫と
 りひかひ宿の女
 と近く招き
 薬の工茂り
 ぶめ隣座敷へ
 りひへこれ此方の
 こと悦びひてかゝる



〇お目
 かにと
 其場
 互ひ
 床へ
 るが
 混雑
 の中
 前
 念
 群
 中
 休
 程
 涼
 内
 ぬ

〇とも
 強
 るぬ
 つ
 病人
 ぎ
 め
 癩
 尚
 伸
 か
 児
 ま



〇つ
 少
 と
 起
 と
 だ
 連
 お
 今
 つ
 ろ

また今日い
 あそくも宅帰る
 心にもみぢ出るにや
 泣ひ涙もまされて東の
 連枝の窓より朝日の
 こすに眼を覚
 見ればお八重が
 おかぬやう母の驚ろき
 皆々城呼起し其処に此処よ
 と探せらる更には知れぬ母
 親が座敷へかへつて娘の卧床を
 へらへらと枕の下へ出さ
 一封のお八重の手跡にて



にもあふ
 ち終
 におあふ
 と手短かに書の
 こゝろ一通
 旅顔にあ
 びて母親が
 涙とをう
 に泣伏て



阿八
 一

書置と
 涙の
 披いて讀
 私事
 度母
 彼下
 孝の上
 あふれと平
 訳りて迎ふ宅へ
 八重れぬ
 世
 此の
 との
 海
 らあ
 彼下
 度母
 孝の上
 あふれと平

仔細何りまはら

引て返ら

ぬ訳ひかゝるせ

打ひけて此母

お斯くそ

とつておめも

矢のころ例も

ひるものを假令

ふのよる事

にらひれ只こ

一人の娘やゆの

徹くやらので

思ふ此母の心か

あつて身をかき

其方の心の安がる

が跡に残つて人々の

心も少く汲ひて

無分別ある量見

我必らず起して

其処におく重の居る様にかた

くごらぬが其内も心せられて若ひあつて

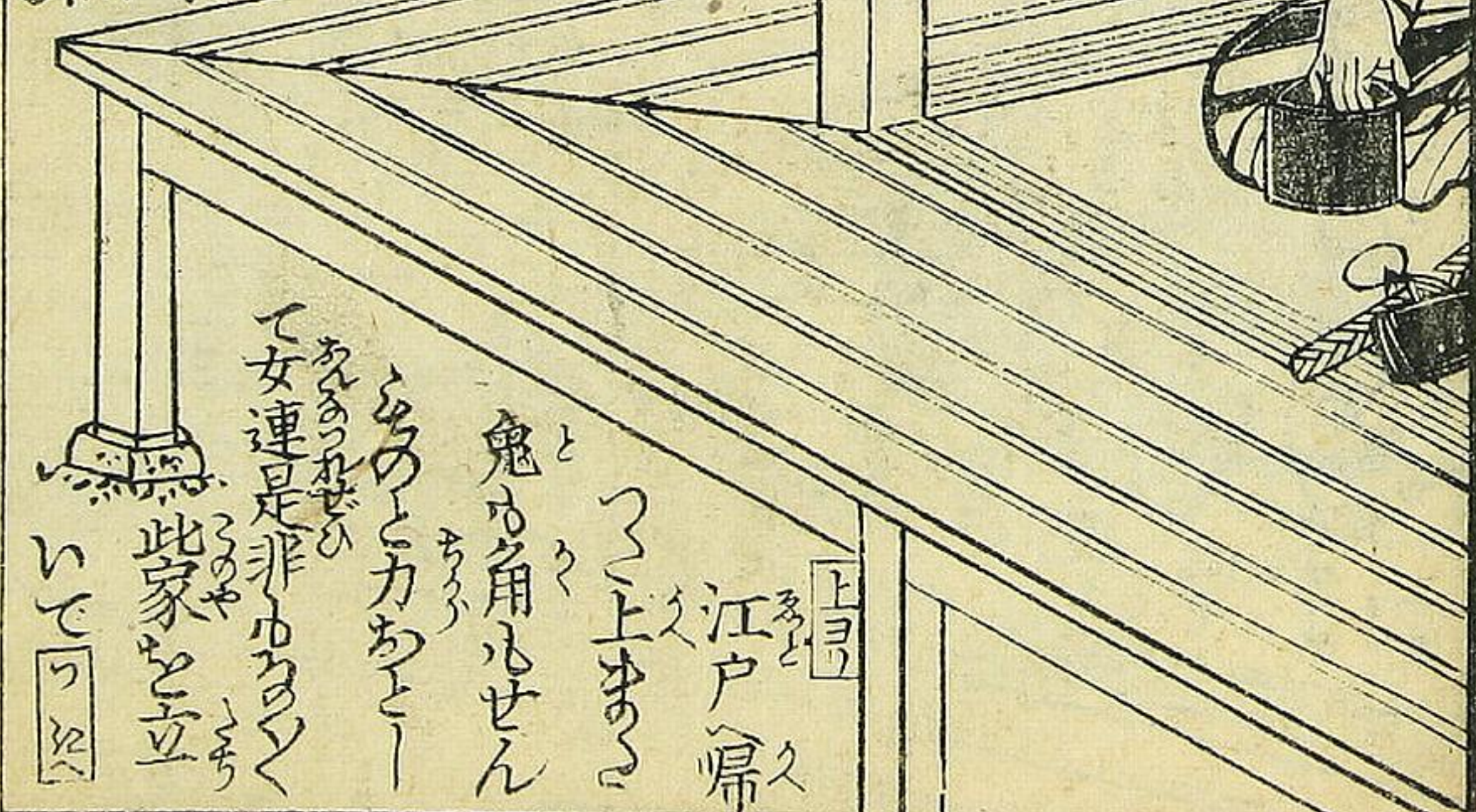
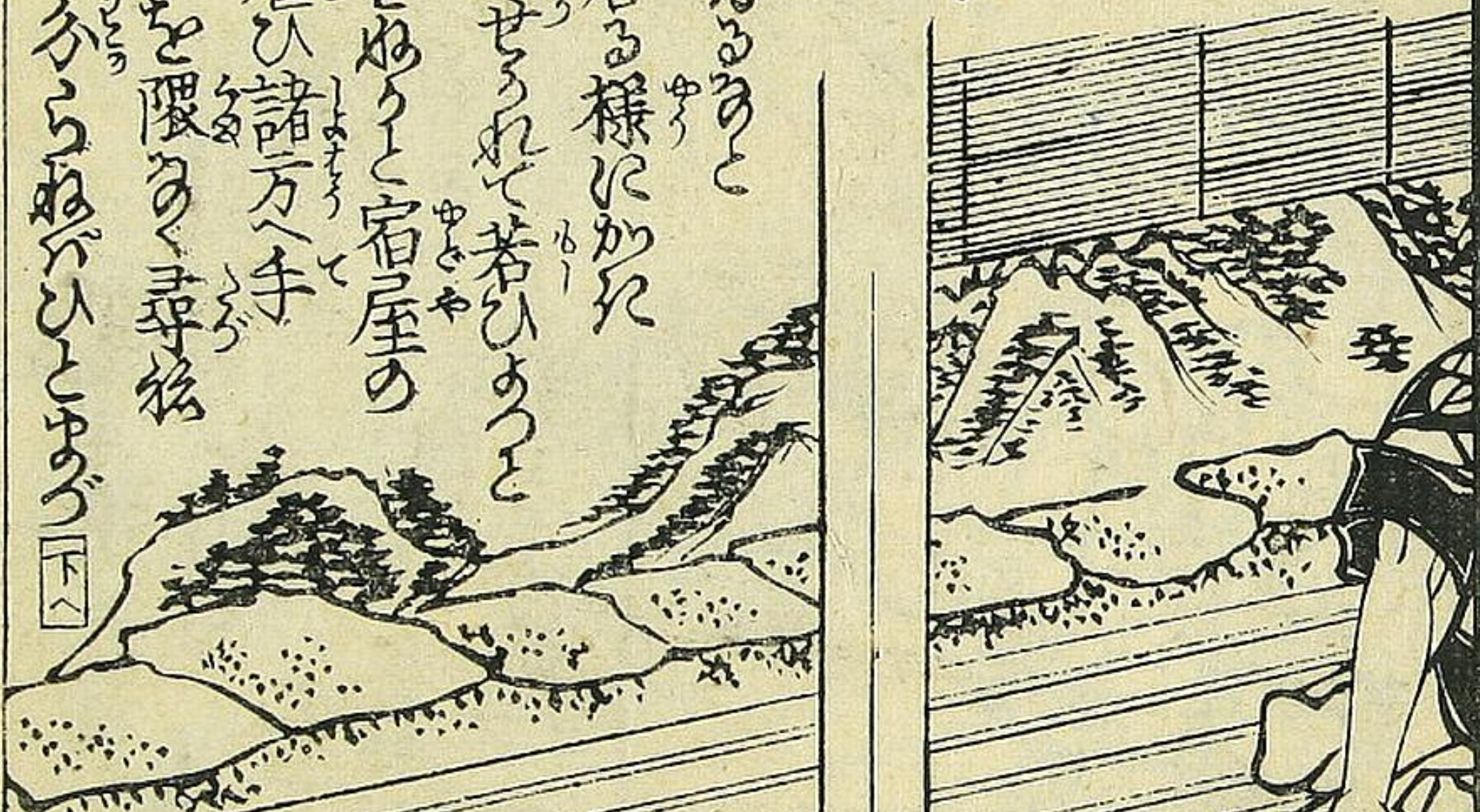
淵川へて沈みいせぬりと宿屋の

主人へ頼んで入残雇ひ諸方へ手

ひけ張つて其近在を隈み尋ね

しが更にゆくあがからぬやひとやぶ

夜嵐上



江戸帰
つこ上あ
鬼の角もせん
あつて力あつて
て女連是非ゆり
此家と立
いて



下

江戸の住家帰るける夫に引替角太郎の群の憂事

知らぬ氣散下の旅の道なき夜の

早く宿に着て箱根の湯治も病の

あつぬ身汗液流すの外も涼しく

内はちこちと鄙珍じき見物に

疲れて帰る宿屋の縁を風介

よめを扇を美びけ暮るど

圍を樂みみける庭の彼方

の離れ座敷端近く析々立

出て此方眺め附の

女中と何やら事さ

合て打戯せるけた

かた婦人の年の頃二十



言はせ 意底 汲て 意底 汲て 言はせ

余らにて纏致

勝れて鹿

起居の様の志とやうに析目正し振舞はる大名の

お部屋さる少の病氣といひて遊散りたの

湯治と其附人の少るはて知られ

ける紀角の朝夕顔見合

世の美と

き婦人



と交み

心園

きつ 女お暇の限は通りて
見へ女中の群の當好を立出で
江戸の方へ帰じのち紀角の妾ふ
四五日余り逗留せし同好はあつて
るのみ天女が影成妙せし故



女お暇の限は通りて
見へ女中の群の當好を立出で
江戸の方へ帰じのち紀角の妾ふ
四五日余り逗留せし同好はあつて
るのみ天女が影成妙せし故

▲並木の
松がその柄
さるねの曉鳥
かあはくの声
聞ら今更
此身はつる
されと思ひ
あせ入
まじ道はそ
むけるぎりあ



○此処の東海道程々谷宿の裏
手にある金沢鎌倉への近
路の下大岡の山中にて
まの夜の暗き路傍に敵糸

父へあつぬ名をさるきまよ
あんあつぬ名をさるきまよ
恩愛深き母親地
歎き成るまふやくと人
の談に聞きあやな
路をたたるおし重の心
か細き流れの岸に
その路のかえの松の
根を腰もち搦てホッ
と息つくと我身あつぬ怖
ろくあつぬあまの来し事を
斯般路へまらつては最早
逐手来しあまの思ひの
外に草臥れられん

今文問屋

地本錦繪

出版御届明治十一年六月十八日 第六大區一小區深川富岡門前町六丁目番地

編輯人 岡本勘造
第一大區十三區横山町三丁目二番地
出版人 辻岡文助

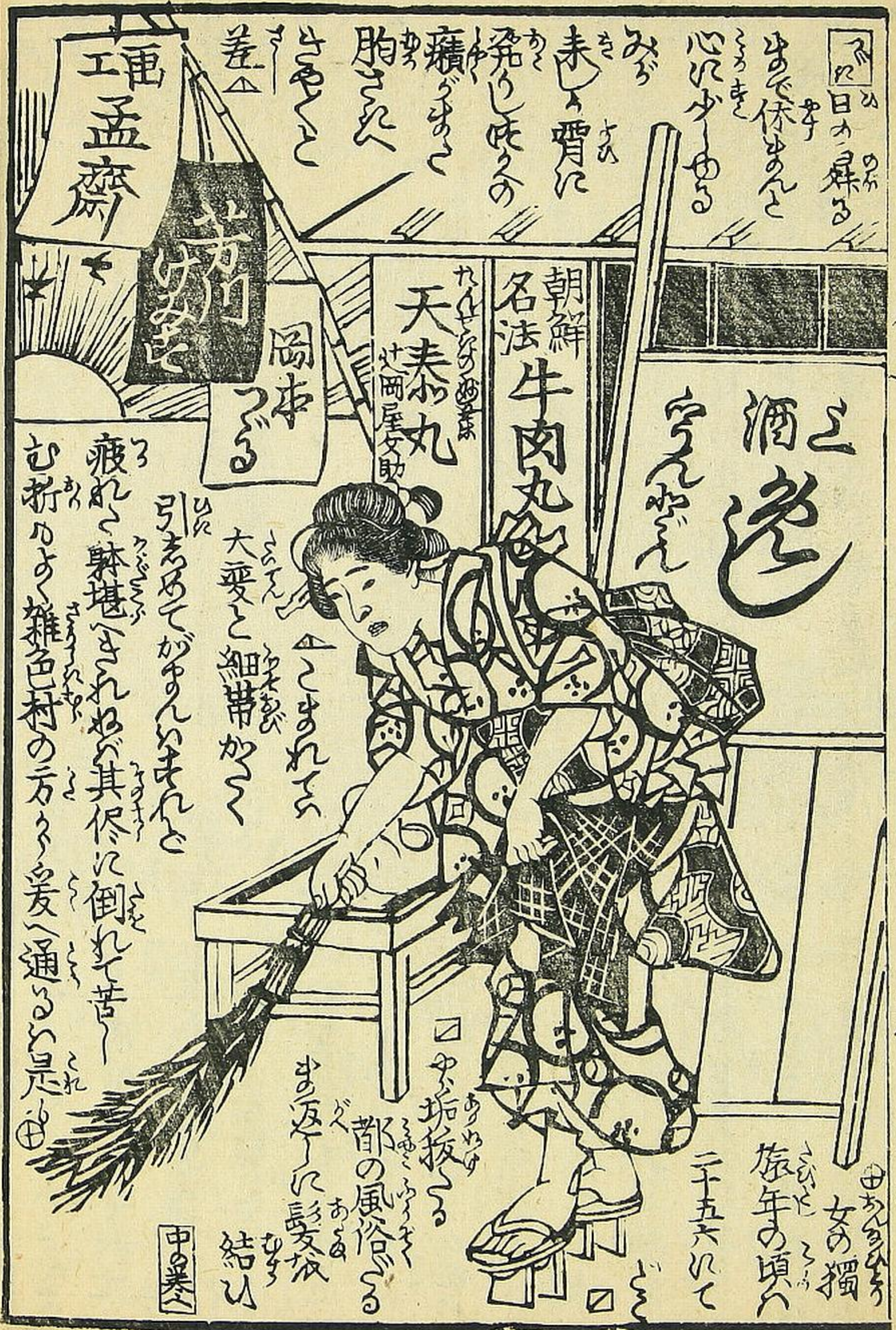
官許 天恭丸

錫入一色代六匁二厘五毛

朝鮮 官許 牛肉丸

大包代二十五匁
中包代十二匁五厘
小包代六匁二厘五毛

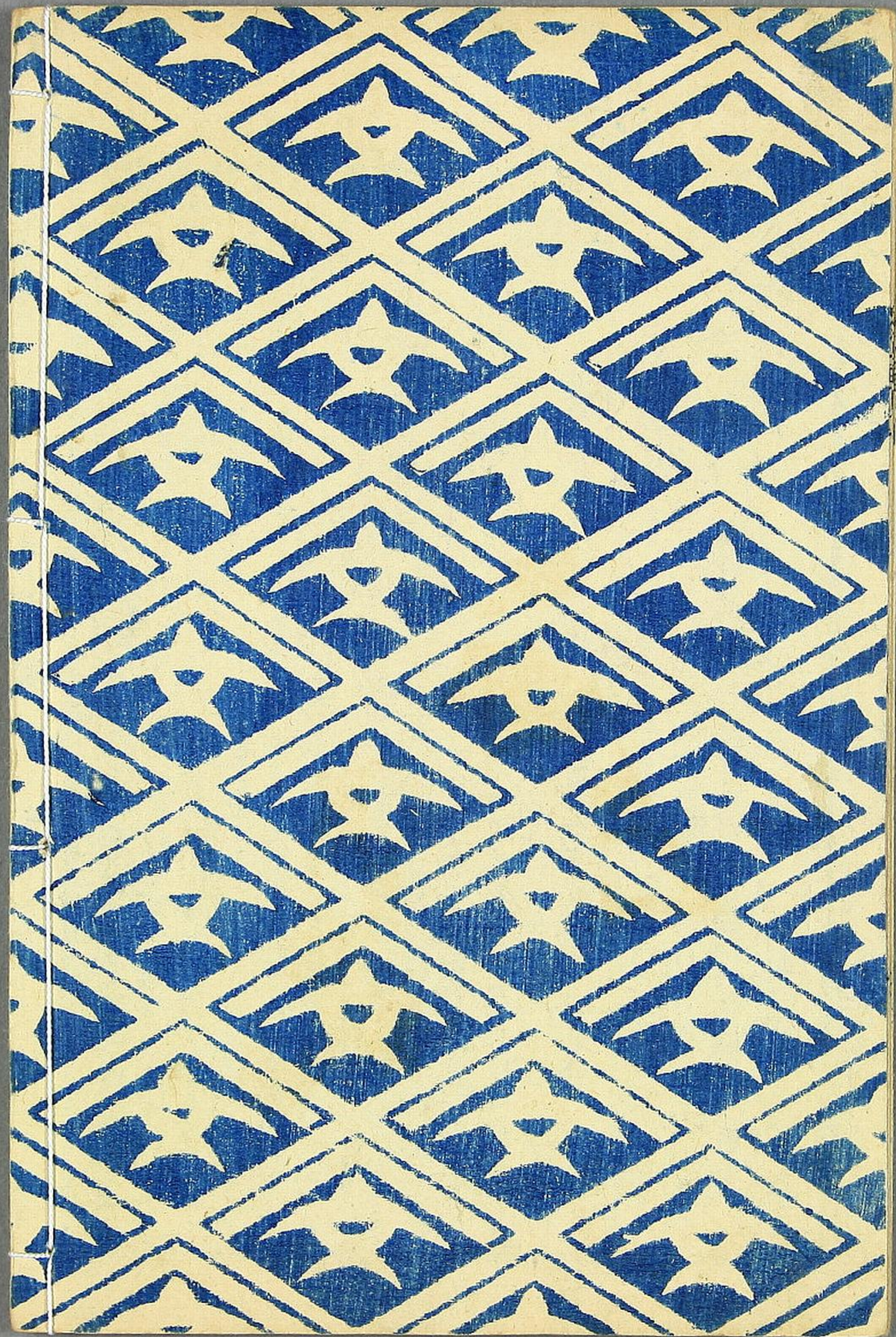
此丸男女老幼皆宜、凡患此症者、服之即愈、其效如神、誠濟世之良藥也、
 一、凡患此症者、服之即愈、其效如神、誠濟世之良藥也、
 二、凡患此症者、服之即愈、其效如神、誠濟世之良藥也、
 三、凡患此症者、服之即愈、其效如神、誠濟世之良藥也、
 四、凡患此症者、服之即愈、其效如神、誠濟世之良藥也、
 五、凡患此症者、服之即愈、其效如神、誠濟世之良藥也、
 六、凡患此症者、服之即愈、其效如神、誠濟世之良藥也、
 七、凡患此症者、服之即愈、其效如神、誠濟世之良藥也、
 八、凡患此症者、服之即愈、其效如神、誠濟世之良藥也、
 九、凡患此症者、服之即愈、其效如神、誠濟世之良藥也、
 十、凡患此症者、服之即愈、其效如神、誠濟世之良藥也、



心少... 未... 痛... 胎... 差...

朝鮮 名法 牛肉丸
天恭丸
岡本

大要と細帯... 引... 疲... む折... 都の風俗... 旅年の頃... 二十五六... 女... 獨... 結... 中興







夜嵐

於多由

洗由女

よ川関

おう本娘

函箱画

筆松

筆梓

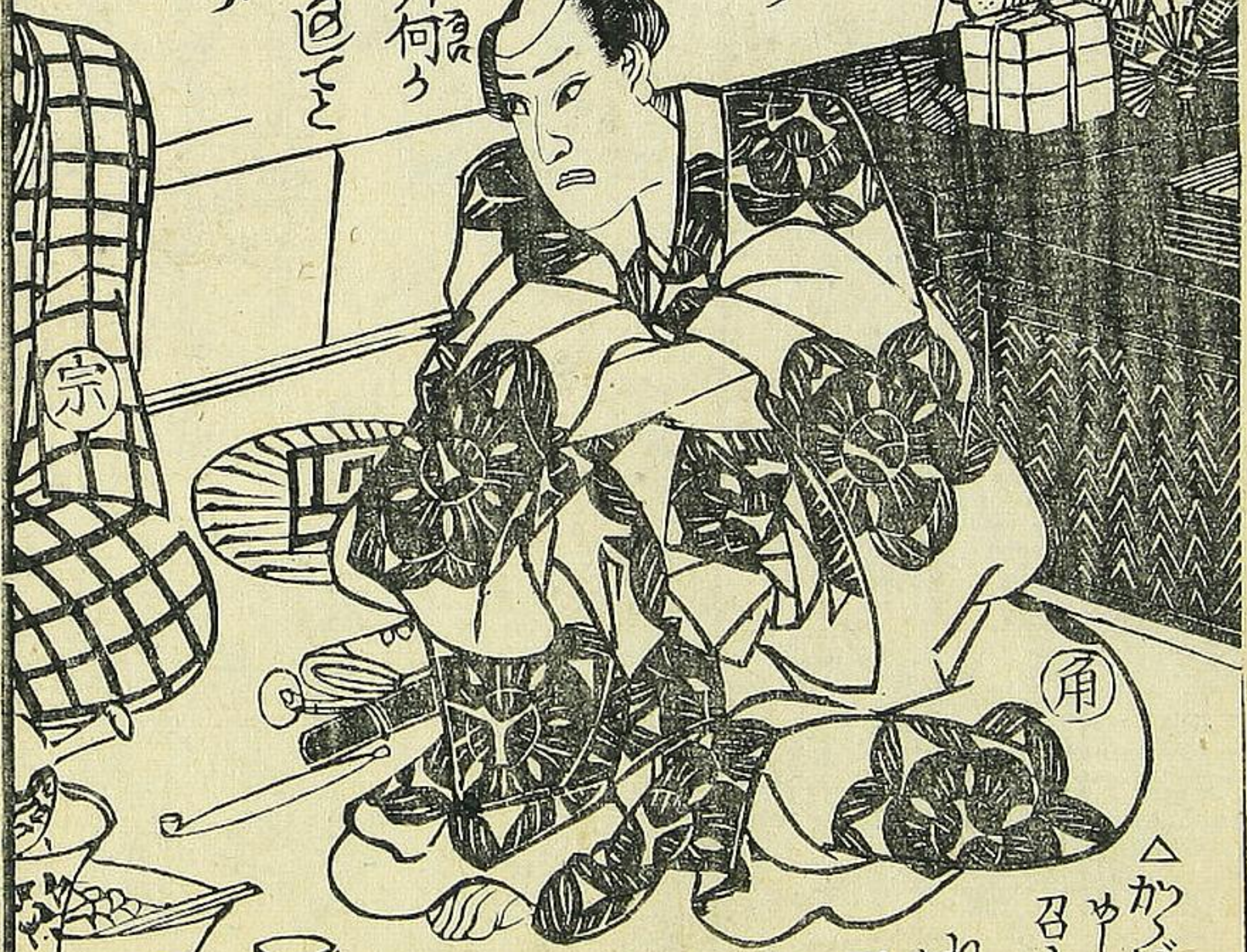
中のみ



白地の浴衣を高く端折て笠箆行手洗せしむる通り
 かつてお八重は見はけて立よあり獨りぞうらぶる帯の間
 の紙へ何や薬と取出てお八重の後廻り抱き起し
 省取るでおら
 錫の中
 薬は少
 お八重の口へ
 ろくませ
 傍への流れか手拭ひごと其水を
 老婦のこみんとせし手厚き介抱に
 ちつく開きさつきさかお八重の地獄で佛
 の思ひ厚く禮をさ述けさあ女の
 この女恩とゆせま様もい相たがひ

女子
 志
 同
 の事との塩梅め
 薬さきので私り
 嬉しう思ひま
 お供の衆へ

お薬のてら買
 泣きしめられしや向られ
 てお八重の涙と拂ひ私や
 獨りぞ鎌倉の者で供を
 るんめりはせしおせんまの者猶
 病氣もといひ困りはすあ蔭
 どのうり治すのしほこり
 女の不審顔みれば爰らの
 お方どうの獨りぞ旅夜は
 仔細のほはち苦一か
 他事あるにあら八重は
 その親切のりだされて包み
 るは鬼うちかみ賣りた



△かぐだの太毒ち
 召る夜露にぬ
 れてはるる
 里へ出て乾
 かか
 つるこ
 まほり
 まるる河
 り鬼にか
 くら
 くら

江戸本石町の呉服店松坂
 屋の八重とゆうは者あ
 先年親父が亡あつて聞
 女打あつて仰あれた
 どうもあみゆけりし事



△かぐだの太毒ち
 召る夜露にぬ
 れてはるる
 里へ出て乾
 かか
 つるこ
 まほり
 まるる河
 り鬼にか
 くら
 くら



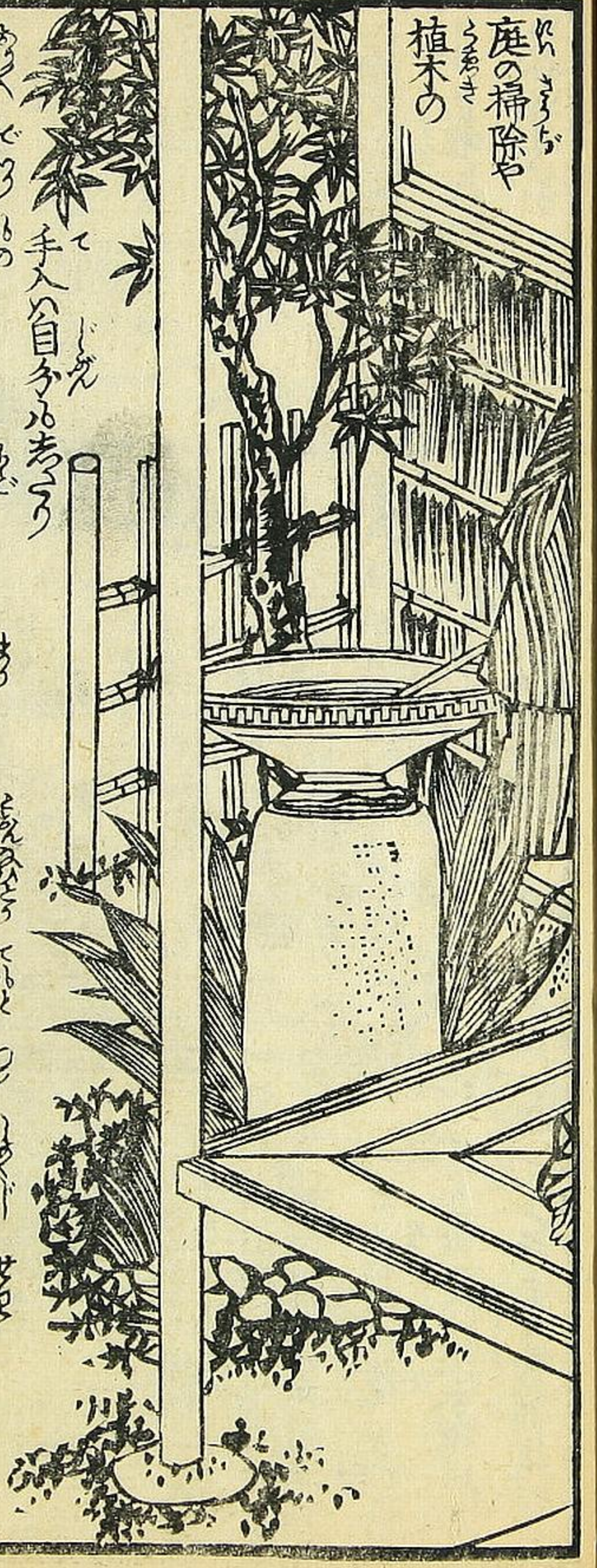
△かぐだの太毒ち
 召る夜露にぬ
 れてはるる
 里へ出て乾
 かか
 つるこ
 まほり
 まるる河
 り鬼にか
 くら
 くら



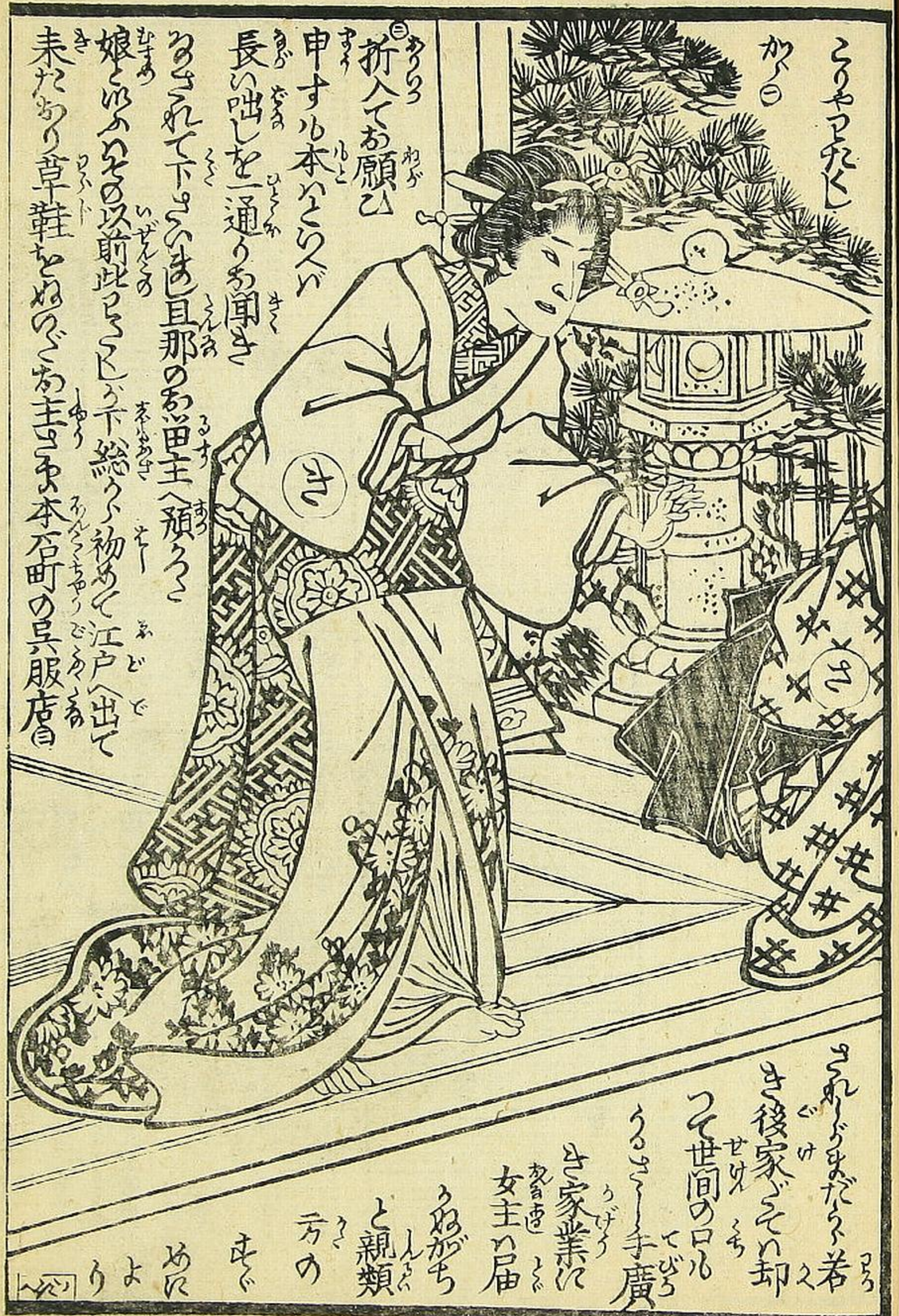
伴のいける。叔角大郎の残暑
 志のさけりもだ見ぬ指根の湯治場か
 江の島鎌倉と夏まで知らぬ遊散旅
 二人の伴の貞まらぬ成笑あてりし日敷も
 秋風身はまむ程のい
 ぐま産の志のく買りの駒一隅田
 の牛島さけりし梅の露へ帰りの月
 るふの頃のり角大郎の風流の
 のみ心成りし海世の事哉

いへ
 おり奉公
 ひと
 人いふくつひま

庭の掃除や
 植木の



折々の出入の者であれこれ程よくさるに任せあれ小女入我手元に使ひ食事の世話のせせせ
 旅の苗主中の不用心ありとて本町の本宅の年々しく召使を芳との四十三の心きたる
 女は苗主居におくと知るが今朝角大郎おそく臥床成おそいで椽をさるめなちのいへ
 茂見廻し心の回みせたおたれ庭の景色がかりつてこのびわくを隣の寮成のまらみ不
 審の顔でお芳成よび隣は是れ明家やうきもたふ越してこれれと尋ねお芳は両手
 成りぬまう申しおげねとつひ此境なるお大名のお妾にたうお名前をきぬ様とつての



このやうに
か
折入てお願ひ
申すも本は
長い咄しを一通り
聞か
るるこれ下
娘といふもの以前
未だあり草鞋をぬ
かま
本石町の呉服店

これよりまた若
き後家ごそれ却
つて世間の口
うさ
女主人の届
と親類
りよ

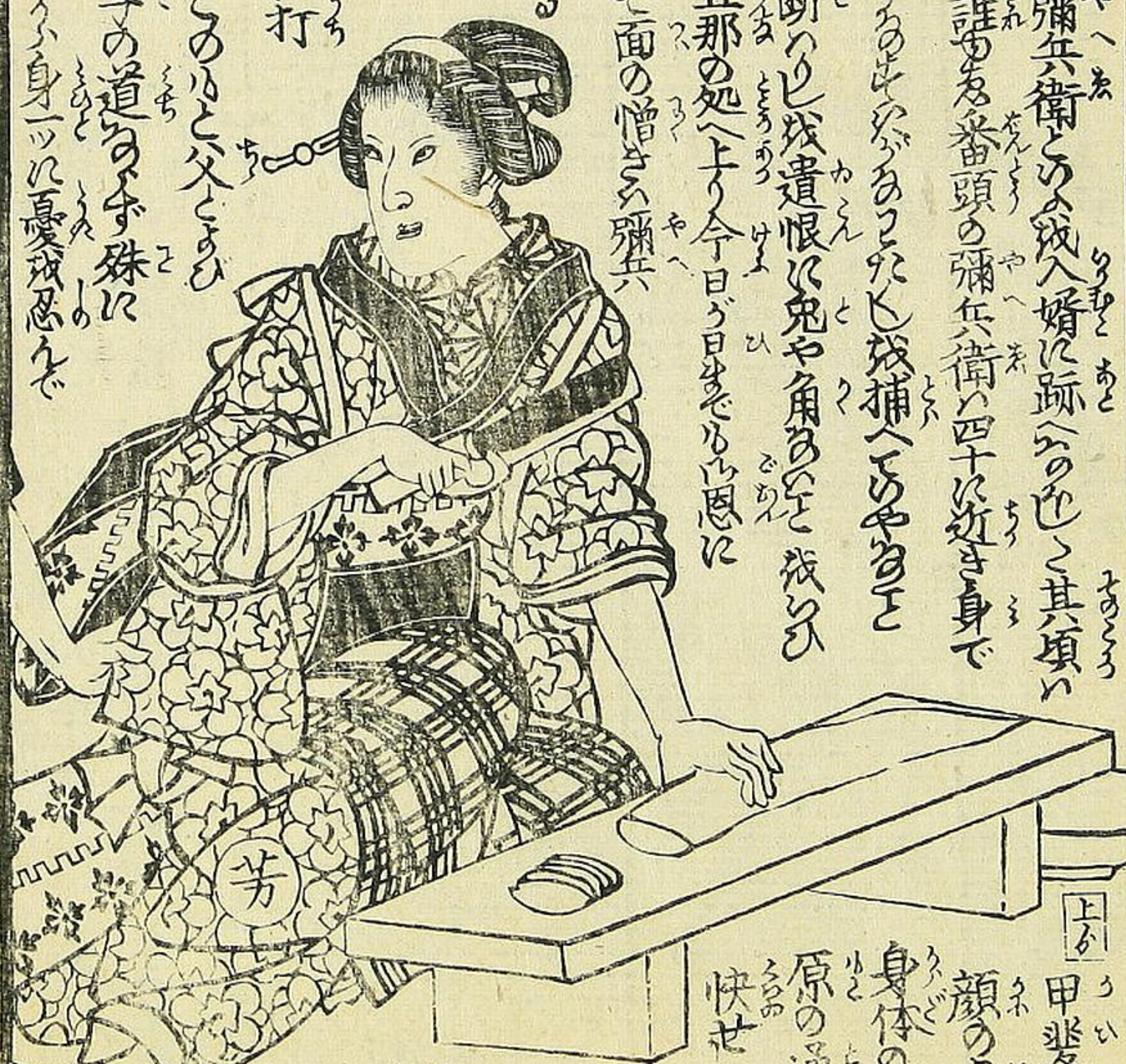


つ
殿様
居候の
此玉家の察
お買
お買
お買
す夫に
千申
先生
の前
お咄
おせ

松坂屋
十四の時
母の
とて夫々
甚

店次はつづる番頭の彌兵衛との縁入婿に跡へる也之其頃の
 此れたぐの暇にあり夫も誰をも番頭の彌兵衛の四十に近き身で
 見つけにぬ色好み同様のものもあつたが被補へるやま
 をかしのものをばけり断つて残遺恨に免や角のほど残りの
 くらへて追出せし夫も且那の処へより今日日暮るる恩に
 ひづる嬉しに又引へて面の憎き彌兵衛
 衛にて假にも親とまぬぬ
 身でいり主人の娘へ
 無体な戀慕のさるる
 るに附まのさるる仕打
 我母親と必らば下るる父と
 るす其入(耶か)さるる子の道もす殊に
 世間の外聞をいさるる身つた憂愁忍ぶ

甲斐のつて
 顔の色つや
 身体の衰う人
 原の通り全
 快せしとく
 先月
 初めに
 女連四
 人で江戸
 宿泊
 大川
 時神
 痛
 人下



日を送る深田女の氣苦勞うつるに
 病被引おとがらるるむむるよ
 瘡もぞ知て折々の煩ふよ
 多うりけれが醫者の勧めで五
 月雨のや暗さるる母と外に女
 中二人被引りて伊豆の
 熱海湯治の
 保養に二月
 ひまの世の中の
 憂もぞ
 され

彌
 明日
 家
 立
 歸
 又
 彌
 兵衛の種々
 加口説まるとんやと思ひます
 りせの廻すると此よ



此方へ顔出し移る私の姪の
 お吉が在野々此地帰る途中
 びて種々今抱成した上で名前
 取さけ伯母の私を天恩う
 けたお主の娘をれその終
 びしてかおれがさうして
 宅へ帰らぬ覚悟う
 く街道へ伴て出バ
 尋ねる人に見つけらぬ
 と神奈川宿の裏手
 通る野毛の知音(立ちま)芝
 濱へ出る押送り便船して

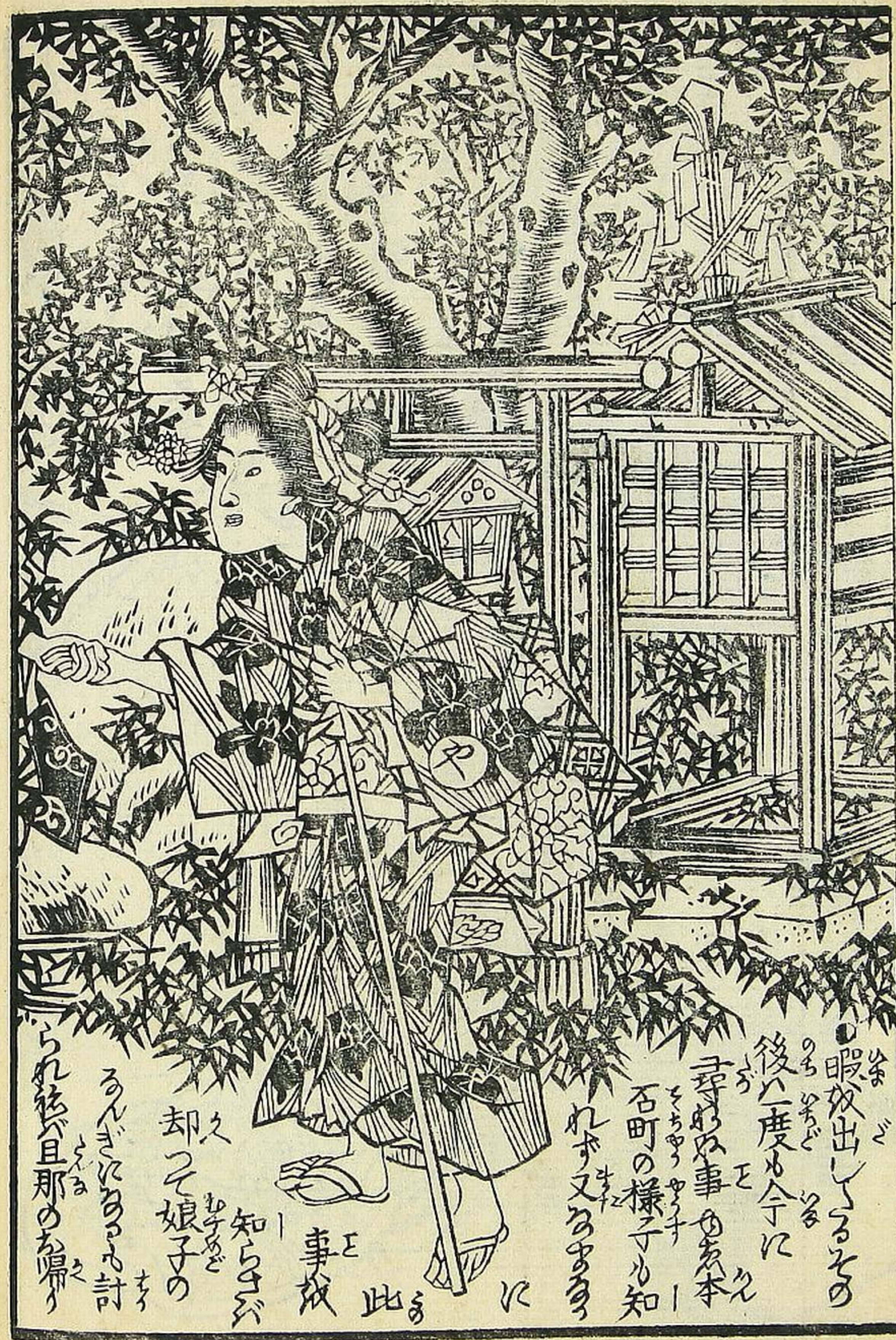
此方へ顔出し移る私の姪の
 お吉が在野々此地帰る途中
 びて種々今抱成した上で名前
 取さけ伯母の私を天恩う
 けたお主の娘をれその終
 びしてかおれがさうして
 宅へ帰らぬ覚悟う
 く街道へ伴て出バ
 尋ねる人に見つけらぬ
 と神奈川宿の裏手
 通る野毛の知音(立ちま)芝
 濱へ出る押送り便船して



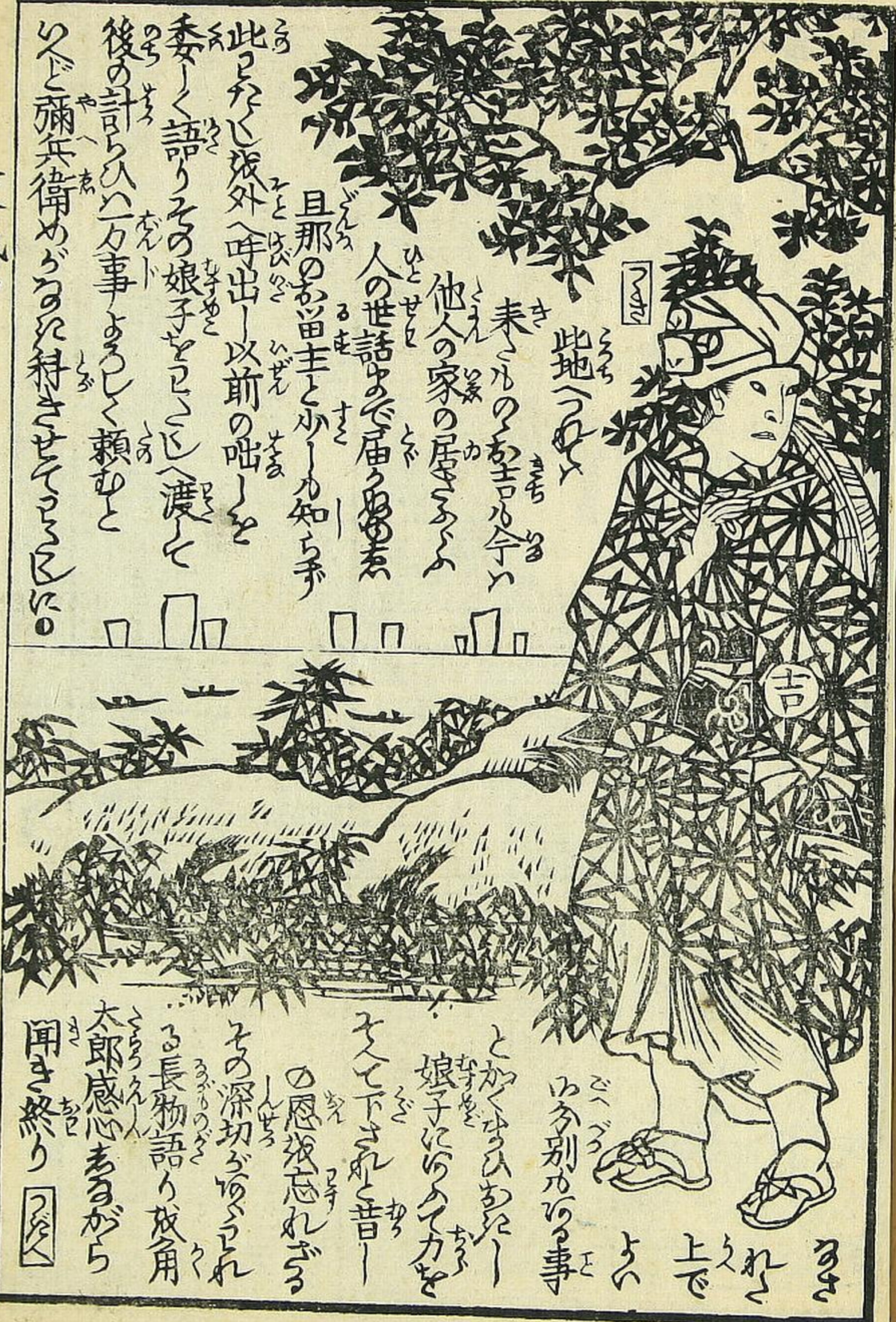
此方へ顔出し移る私の姪の
 お吉が在野々此地帰る途中
 びて種々今抱成した上で名前
 取さけ伯母の私を天恩う
 けたお主の娘をれその終
 びしてかおれがさうして
 宅へ帰らぬ覚悟う
 く街道へ伴て出バ
 尋ねる人に見つけらぬ
 と神奈川宿の裏手
 通る野毛の知音(立ちま)芝
 濱へ出る押送り便船して

此方へ顔出し移る私の姪の
 お吉が在野々此地帰る途中
 びて種々今抱成した上で名前
 取さけ伯母の私を天恩う
 けたお主の娘をれその終
 びしてかおれがさうして
 宅へ帰らぬ覚悟う
 く街道へ伴て出バ
 尋ねる人に見つけらぬ
 と神奈川宿の裏手
 通る野毛の知音(立ちま)芝
 濱へ出る押送り便船して





暇放しつゝその
後ハ度々今に
尋ね事の本
石町の様も知
れず又も
事此
知らず
却て娘子の
らんぎに
られ後且那のお帰



此地へ
夫の家の居
人の世話
且那のお留主と少い知
此のたじ候外呼出以前の咄
委しく語りその娘子と
後の計らひの事よしく頼む
いと彌兵衛めがら

とかくはひあ
娘子にのりて力を
そて下され昔
の恩忘れ
その深切な
る長物語り
太郎感心あるから
聞き終り



縁またたきを海か
 誰か白髭の神
 るる身如何に
 せん世成じ島とあつて
 尻にあらみの浴衣の
 日よを瘡にとちか
 れ取乱
 ころ
 その
 様成見られ
 方ろと思へ今
 さう恥しく礼の辞も
 何と名よた口ん
 夜鼠中



次美のつらさ
 かその娘は八重といふ
 であらうものさ何ふた
 お芳はいつくじ如何
 くと旦那がそのお名を
 と不審さるの尤もあれど
 八重といふ神木川で泊りあつて
 瘡たとちられ母らも八重と呼びゆる
 さうだ哉見かみて此私が進せと薬を漸々と
 用さうつら娘子あらん何ゆてか不思議
 事とお八重泣き笑ひを互ひみ
 見かみ顔とか何尺せぬ



知つての通り何事も家後
 任せたくわらざるが及ぶ事
 およじと共ふ力にあらざ
 どの様にも
 お前が難儀
 儀なる
 ほうねやう
 まつちのそら
 むとめ不自由
 むのいふ心おねほ
 あわれの情の言葉にゆか
 重なるおぼしむ嬉しく一日ごと
 送るよふに五ひたにひつ果山にのり

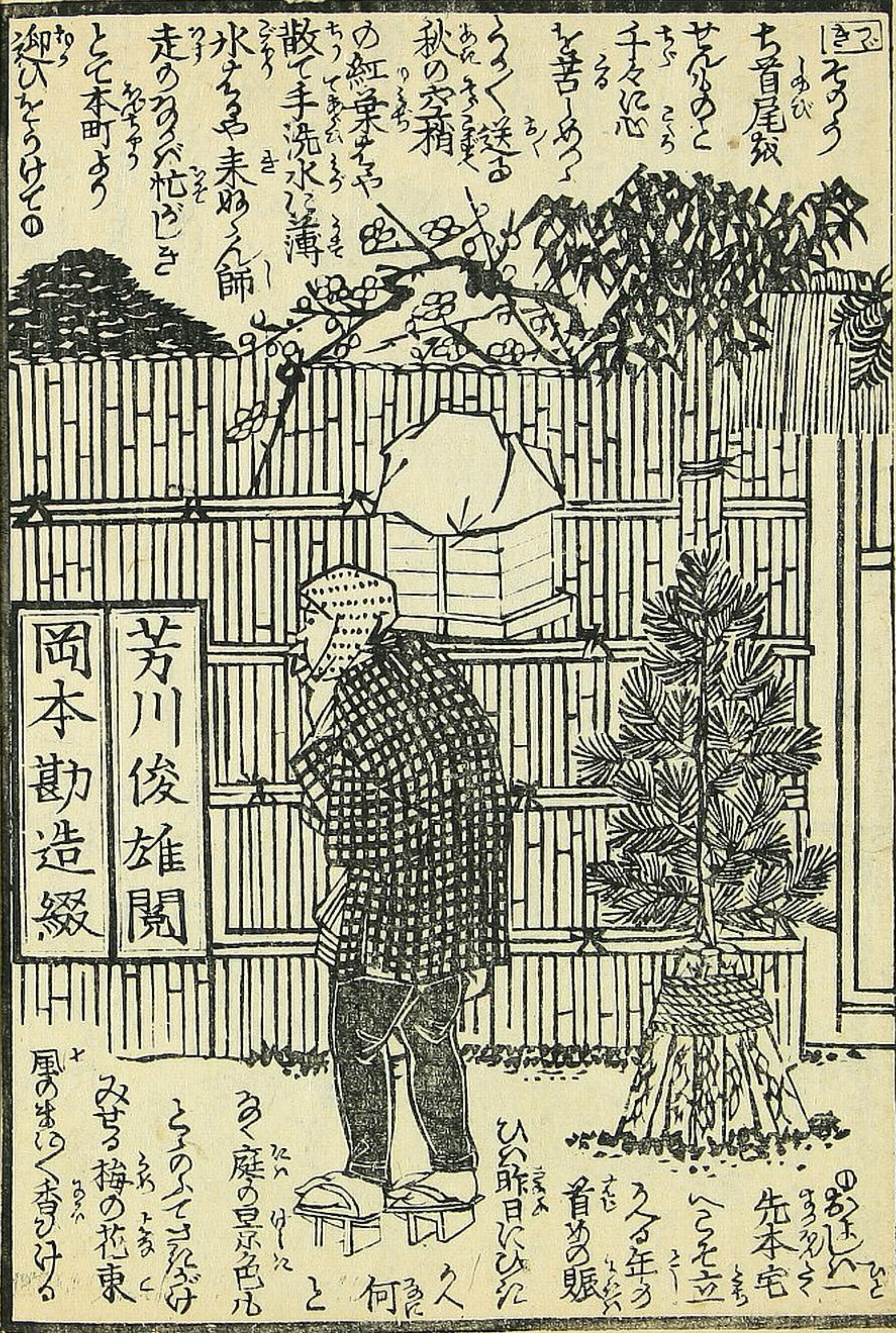
仕合せあらんと
 心の内に喜ぶこと
 人の娘成沙汰
 色にふ
 今
 思ふがまゝ捨あつて「つげん」



上の上のよ
 様は力に
 ろつてゐる
 どれと優
 ことへい
 角太郎お前が
 たよりに思ひ
 およの私しが
 少々の時と世話にのり

△籠とる否
 むぬ二人
 下紐の
 目
 睦
 有
 様
 知れど

010190508434



秋の空積
 の紅葉
 散て手洗水は薄
 氷も未ぬる師
 走のあつた忙しさ
 とを本町より
 御ひをうけとの

岡本勤造綴
 芳川俊雄関

先本宅
 へこそ立
 うる年
 首の賑
 いの昨日にひた
 と何
 る庭の豆京色
 とよのてさな
 みせる梅の花東
 風のまゆく香ひける

銅版開化玉編全
橋田豊三郎編

開化女用文章全
島田豊三郎編

近世紀聞
漆寄延房編輯

初編より
 九編迄出版
 以下追々発行

取引要文全
田島象二編輯
高業
小学

義烈回天百首全
鮮齋永濯画

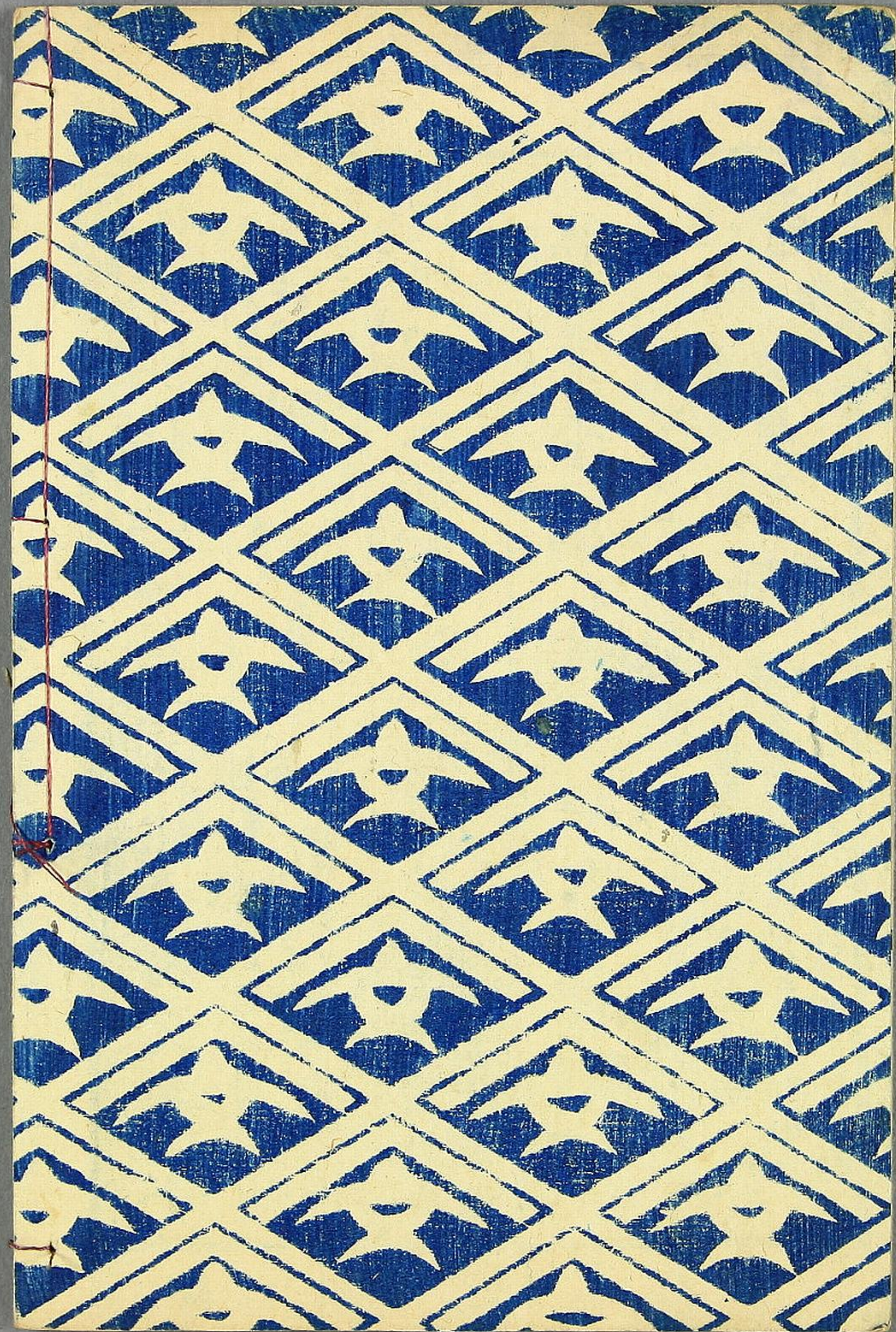
金花七變化
魯文作
國貞画

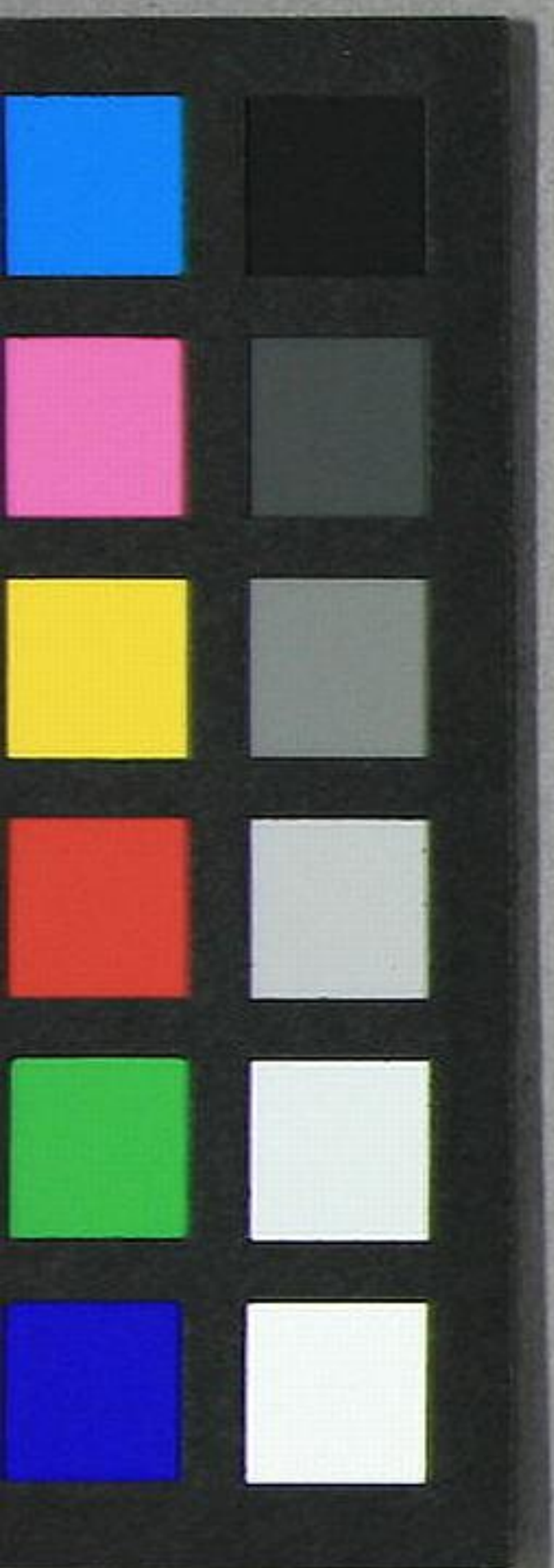
東京全圖全
西野古海編輯

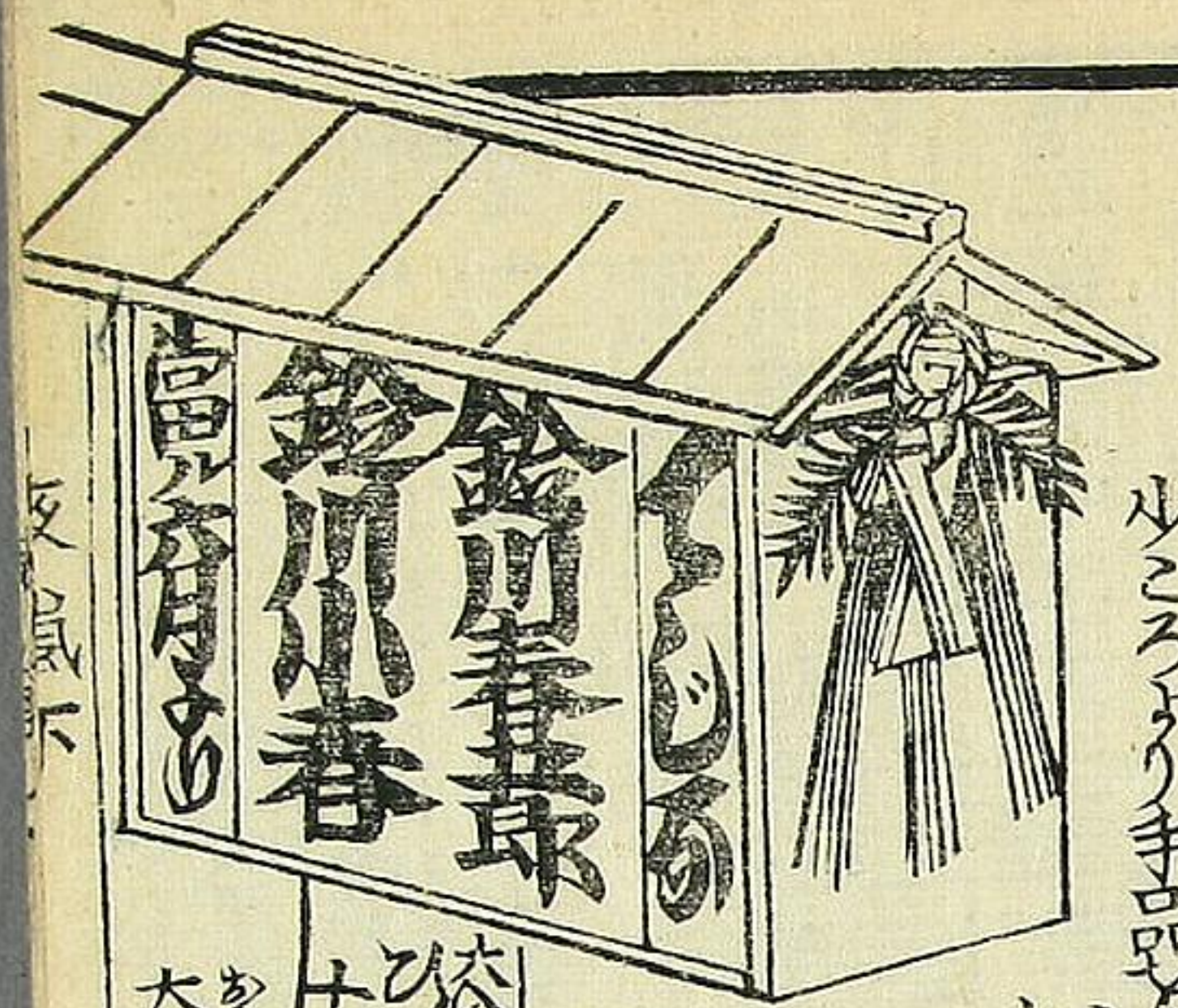
濡衣女鳴神
秀賀作
國貞画

文
地本
 錦繪問屋

出版御届明治十一年六月十日 第六六區一小区深川富岡門前町六十二番地
 編輯人 岡本勤造
 第天巨下小四横山町三丁目二番地
 出版人 岡本勤造
 助







大窪家の若殿
十五冊

適つて十七の春の半に
お手先の早業お意に

で保養せよと有かた御
せ成受て侍女

四季の眺の色々と愛する浮世と島と
表成飾と菩提つまむ数珠の袖の内と
薫煩惱の花の色あつ小梅の里紀角住り別荘に
隣り玉屋の寮を買つけ引移来其入元浅草
鳥越の甘内橋の辺に住む原由某の娘あつぬと幼
少ころより手口と習ひ其藝名を鈴川

其西親の浮み出で其翌年コロリと
病のこめ枕成並て西親と此世を去
跡の外に親族のるるの残の跡を
御殿の内引取て栄耀に送る春秋の
替り三年目に麗姿を
殿様が頭に奉去つるのし後此世
と同一間に籠り嘘を奉る春
経にこころを月日を送る
のみ瘦衰へて食事さへも
と聞て後室より二週間此
暇成賜り箱根の温泉
で保養せよと有かた御

芳川関 墨本綴

おきぬ
乃あまの



おきぬの御

下の
おきぬ



身に添て折目正の
 禮式致つて思ひ
 のみ
 るに合ふ屋敷に
 用ゐる
 身身
 彼に

黒
 合口始終と聞て容
 易く引く小者頼んで紀角の上
 悉く探り今小梅の別荘に
 住むを知て



其外附の侍諸共は宮の下ある大示良屋とらひ
 旅宿に暫く逗留する頃對ひ座敷の相支板見物で
 頼み探つて聞けり本町の紀角
 とらひる藥種問屋の若隱居
 とらひる頼みは残りて
 立ちくる江戸の屋
 敷の丸屈を厭
 ふる上湯治場の
 ざんとの保養が

川鈴
 四十の上と三三三
 こちの雪のこけ
 のちと物思
 心知る婢女
 腹と



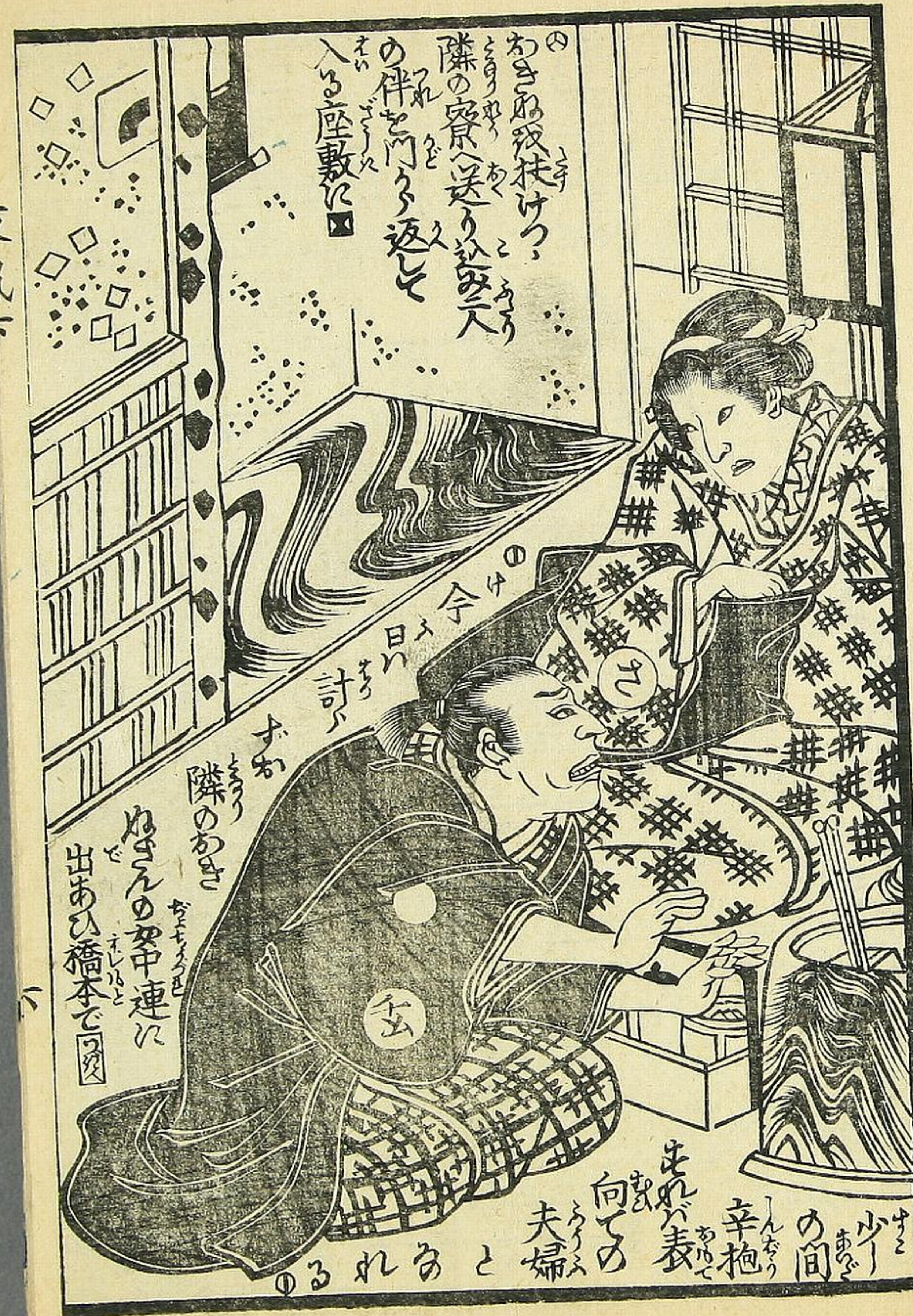
奥向の首尾越つていひをいふ
 病氣と云做て保養かして亡
 君の後世故吊る庵室に
 爰へ移り住みし其時
 屋敷の重役々若此

世を忍ぶ身の是非の
 八重坂家残つた二人
 成伴ありくと出かけた跡へ
 引ちか言来し日頃隣
 の容や此
 家へお幫
 同半か
 出入す
 橋
 の敷
 醫
 にて



後良縁あつて方付るが
 屋敷で世話かしてせん又生で潔く
 送るとあつた扶助かせん身の振方の
 何れとも心の代に任せると月々に多く
 手當と賜りのけれは妹のお事とあつた
 夜の外に下婢二人男とあつた此頃新
 抱へる下部の甚八のみにて主従六人
 豊うたつて暮しける○打を拍子
 同ト七種の舌の方う明そめて霞たる鬼庭の
 戸を押入来る二人の客は彼宗匠と豆八は
 年首の禮いそつて今日節句に初卯を持
 み殊に恵方午の方は非とも出初のお供
 せんとそやし立るに角太郎とあつた初卯に詣でんと

其客
 黒林
 玄達と呼者
 り案内せ
 ず庭先
 出慶
 大将宅の羨念の
 側ひを待つて



の
 おきぬ我扶けつ、
 隣の寮へ送りぬみ入
 の伴を門も返して
 入る座敷に

今日
 計り
 隣の
 ねんのか中連に
 出あひ橋本で

少
 の間
 辛抱
 まれば表
 向ての
 夫婦
 るれると



春のあ
 ぬれ痛く酒を過し
 苦み様子に其
 場を切あひ打
 伴の痛
 路角太い

志あふりとお八重
 が物成案なる例
 の事と角太郎
 側座て顔打
 眺る斯か九く
 と陽氣にさう
 くら外へ出られぬ
 お前の身の上氣
 多の節ぐの尤も
 下や其内お芳の働
 びでどうエラ咄けや
 う



010190508442



思ひし肩かかひしを重衣卸し足と
 首と両手をかけ中の釣と南無阿彌陀佛の
 声ゆるりし隅田の流へさそふこと
 〇この小舟は棹も舟も男は何者
 して善きも悪きも二編をよみて
 まうたすへー

橋田郷編輯
 銅版開化玉編全

島田豊三郎編
 開化女用文章全

漆寄延房編輯
 近世紀聞
 初編より
 九編迄出版
 以下追々発行

田島象二編輯
 高業
 小学
 取引要文全

漆寄延房編
 義烈回天百首全

魯文作
 國貞画
 金花七變化

新撰
 西野古海編輯
 東京全圖全

秀賀作
 國貞画
 濡衣女鳴神

今
 地本
 錦繪
 問屋

編輯人
 岡本勘造
 第天巨十三小區横山町三丁目二番地
 出版人
 过岡文助

出版御届明治十年六月十八日 第六天區一小區深川富岡門前町六十番地

